

[講演要旨] 福井震災後における丸岡城の再建と「町民意識」

大学共同利用法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館* 高野 宏康

The rebuilding of Maruoka-jo Castle and town people's consciousness after the Fukui earthquake disaster

Hiroyasu Takano

National Museum of Japanese History

117 Jonai-cho, Sakura City, Chiba, 285-8502 Japan

§ 1. はじめに

1948(昭和23)年6月28日に起こった福井地震により、福井県北部にある丸岡城の天守閣は全潰した。丸岡城は、1576(天正4)年、柴田勝家の甥・勝豊によって築城された古城で、1934(昭和9)年には天守が国宝保存法に基づき国宝に指定されている。震災当時、丸岡町長だった友影賢世(1870-1970)は、丸岡町の復興都市計画に取り組むなか、崩壊した丸岡城を丸岡町の象徴であるとし、再建すべく政府への陳情や資金収集に奔走した。震災後の丸岡町では、救援が遅れ、復興都市計画の進展も十分とは言えず、町の再建がままならない状況で丸岡城の再建を重視する友影町長に対し、町民や町議会では批判もあったが、1955(昭和30)年、再建工事が完了した。

本報告では、福井震災後の丸岡城の再建過程と丸岡城をめぐる「町民意識」を分析することにより、災害復興における象徴的な建物の果たす役割と、再建過程における諸問題を明らかにしたい。

§ 2. 丸岡城の再建過程と町長・友影賢世

福井震災により、丸岡城下の家屋はほぼ全て倒壊し、丸岡城の天守閣は西北隅に転落し、3階部分の屋根の一部がわずかに原型を留めるのみとなった。国庫補助金により、部材は解体・保管され、再建工事の開始を待つことになった。丸岡城復興事務局が設置され、財源について関係方面に交渉した結果、3ヵ年計画総工費2,700万円、その内国庫補助は六割で再建工事が実施されることになった。旧部材を活用し、歴史性保持の方針をとりつつも、埋没貯水槽などの近代的防災施設を取り入れ天守閣再建事業が進められ、1955(昭和30)年3月に竣工した。

丸岡城再建を積極的に推進したのは、丸岡町長・友影賢世であった。震災後、友影町長は、復興都市計画の協議のため上京する際に国の文化財保護委員会に丸岡城の復興を要請したが、なかなか受け入れられなかった。国と県の補助金の残額を地元が負

担する条件で再建が承認された。友影町長の丸岡城への思いは、丸岡城再建後の1955(昭和30)年に作成された屏風「友影賢世事蹟」などから知ることができる。ここでは「由緒深きわが霞ヶ城は、丸岡町の象徴」「このまま土塊草芽の中に朽ち果てしむべきものではない」「万難を排しても再興復元すべきもの」という丸岡城への強い思いが記載されている。

§ 3. 丸岡城をめぐる「町民意識」の変遷

友影町長らの丸岡城への「想い」から、丸岡城が町民の象徴であることは自明のように思われるが、近代以降、丸岡城は一貫して町民の象徴となっていたわけではない。1971(明治4)年、丸岡城は陸軍用地となり、翌年には城郭は民間人に払い下げられている。天守閣が取り壊される計画もあったが、費用面で中止になっている。それを聞いた南保治平ら四人が50両で譲り受け丸岡町に寄贈したが、維持管理が問題となり、丸岡町は天守を公会堂にすることにした。大正～昭和初期にかけて都市計画が進められ、住宅や道路が整備された。戦時期には軍用施設となり、民間人が城内に入ることができなくなっていた。

以上のように、近代以降、丸岡城は紆余曲折を経てきたが、震災前には丸岡の繊維産業の労働者として朝鮮人が丸岡城周辺に多数居住するようになっていたことは重要である。1947(昭和22)年の昭和天皇の行幸に際して治安の悪さが指摘されており、震災後、丸岡城周辺にはバラック街が形成されている。友影町長による丸岡城の再建にはある種のスラムクリアランス的な要素があったと考えられる。震災前後の丸岡城周辺の朝鮮人の存在については、震災誌や自治体誌には全く記載されていないが、震災前後の丸岡城をめぐる意識を考える上で検討しておく必要がある。1955(昭和30)年に再建工事が完了すると、自治体関係者、町民らによって盛大に祝われた。丸岡城が町民の象徴として確固たる位置づけを得たのは震災後の再建のあとであるといえる。

* 〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117
電子メール: htakano2009gm@gmail.com